

つ。此の由縁を以て長家代々の祈禱所也。といへり。平次按するに、能登國鳳至郡穴水川嶋村白山社の舊神職四柳氏に左の草案あり。

好便に一筆令啓候。酷暑之節愈御安康御達者之至与存候。然者金澤眞福院濫觴之儀御尋被越、致承知候。中古まで白山宮に社僧在之、南八坊北八坊とて拾六坊、天正五年五月まで薨を並候處、同年九月謙信亂入之節、寺社致放火、離散之内西正坊与相稱申候。則長谷部家代々御祈願所に候。依之連龍公城廓金府に御引移候節、西正坊も轉地致し候与、當社縁記に詳細に相見得申候。左候へば、連龍公格別之御歸依被爲在候寺に而、轉地之後、西正坊を眞福院与被革候事、右舊記耽相調理候處、前段之通候間、左様考解可然存候。依而別紙寺號相記進候。爲厥返酬迄如此候。不備。

六月廿七日

穴水社大宮司 判

池田永哉様

穴水白山社僧寺號書

北八坊

西正坊 天正五年之比現住惠範寺在之、金澤以轉地。 東向坊 大祥坊
長法寺 法悅坊 今之法性寺也。 明應寺 慶源寺 西向寺
南八坊
龍山寺 五知庵 洞光寺 青龍寺 今之來迎寺也。 淨明寺
觀音寺 十禪寺 妙堂寺

合拾六坊

惣號本寺川嶋寺

右は、長氏より尋問有之に付ての答書也。されば穴水白山社僧にて西正坊と稱せし比、長家の祈願所にて、殊に長連龍格別歸依せられしゆゑ、金澤へ轉住し、眞福院と改稱せしもの也。龜尾記に當寺開祖松波常陸介義智の子といへるは、貞享二年の由來書に載せたる覺忠法印の事ならんか。松波常陸介義智は畠山義統の三男にて、文明六年三月松波へ入部し、三千貫餘を領す。是松波氏の元祖也。松波氏没落は、義智より六代常陸介義親、天正五年閏七月七尾落城の時、七尾の諸將と共に松波城を守るといへども、越後の將長澤筑前の爲に義親等戦死すと、三州志にあり。然らば龜尾記に載せたる趣も全く請けがたし。又眞福院の由來書

に、越前國より金澤へ罷越すと記載せしは、傳聞の誤ならんか。能登國より金澤へ出で、長家代々の祈願所たりしを過聞せしなるべし。

○眞福院地藏堂

此の地藏は石像にて、門前なる地藏堂にあり。古作にあらすといへども、靈驗他に異なるよしにて諸人信仰せり。毎年六月廿四日には眞福院の地藏祭とて、諸人參詣群をなしけりとぞ。

○近藤無市舊邸

有澤永貞の古兵談殘囊集に、近藤無一が屋敷は、今の近藤三郎左衛門屋敷也。とあり。按するに、近藤三郎左衛門居邸はみつがん近所と、元祿六年の士帳に見ゆ、延寶金澤圖に、眞福院の隣地を岡田十右衛門、其隣を山名清左衛門、其隣を近藤新左衛門とありて、新左衛門は無市の舊邸を賜はり、夫れより、世々居住せり。無市の家系に非ざる近藤氏の數代此の地に居住せること奇といふべし。

○近藤無市傳

或は無一之助ともあり。藩翰譜に、天正十一年二月中川清

秀、秀吉の方人して、近江國志津ヶ嶽の彼方なる余吾、湖の邊に陣を取り、佐久間盛政が爲に襲はれ、軍兵數多討たせて、自らもさんぐに戦ひて、近藤無樂に討たれけり。とある無樂は無市の誤也。關屋政春古兵談に云ふ。志津ヶ嶽の時、坂口山城に中川瀨兵衛、秀吉方より籠め置かれたるを、佐久間玄蕃攻むる。城中より防ぎ戦ふといへども、多勢に無勢不叶、既に大手破れなんとす。玄蕃家人に近藤無市と云ふ者あり。後の方より乗込みたるを見て、續いて乗込む者多し。無市眞先に立て押込みける處、床机に腰を懸け、團扇を以て首實檢して居たる者あり。是ぞ大將よと見てければ、無市餘の者には目もかけず、つる／＼と立懸り、横討に討倒し、其の儘乗懸り首をかき落す。跡より味方大勢續くを見て、敵ども皆逃散りたり。無市餘りの嬉しさに首を引さげ、あたりを屹度見ければ、組頭是にあり。無市これ見給へと云ひければ、組頭扱手柄限りなし。大將瀨兵衛なり。急ぎ玄蕃殿の實檢に入れられよ。某同道せんとて、打連れ立ちて行き、玄蕃の前に畏り、大將中川瀨兵衛を近藤無市討取申すと云ひければ、玄蕃大に競ひて、扱も手柄